

表 3 友蔵さんをどんな人と思うか

	単語	内容	
否定的に使用されている単語 (友蔵さんのネガティブな側面を表現している単語)	淋しい	個人に関して	ちよつとずついろんなものを失くしていった喪失感がある。投げやり。
			誰も自分のことをわかってくれないと、思い込んでいる。
		人間不信になって、心を閉ざしている	
	家族に関して	息子は電話はくれるが、顔を見に来てくれない、話も聞いてくれない。	
	近隣に関して	一人暮らしだからさびしわけじゃない。訪ねてくれる人、話しかけてくれる人がいないから淋しい。	
	難しい	一人で、みんなの中に出ていくのは、最初は難しい	
		男の人は、誘ってもみんなのところに出てこなくて、難しい	
		頑固というか、関わり方が難しい	
	高い	むちゃくちゃプライドが高い(だから、息子から何を言われても聞く耳がない。近所からも1人浮いてしまうことになる)	
		男性は(訪問するにしても)敷居が高い	
無い	近所とのつきあいが無い		
	息子との会話が無いし、自分(友蔵さん)から電話もして無いような気がする		
面倒くさい	奥さんが亡くなって、何もかもが面倒くさくなっている		
	外に出て、人に会うことが面倒くさくなっている		
	男って、年いってきたら、なんか面倒くさいんやな		
	知ってる人で、ご飯食べるのも面倒って言う人がいた。一人やったら「もうええわ」って。		
弱い	考え方が弱くなっている		
共感的に使用されている単語 (1人暮らしの男性に一般的にみられるものを表現している単語)	多い	ご飯も炊かず、お弁当だけで済ます男の人、多いよ。	
		外に出て人と関わるのもややこしい。一人がいいと言う人、多い。	
	優しい	こういう(一人でひきこもるような)人は、男の人に多い	
	優しい	不安で淋しいから、優しい言葉かけられたら、騙される	

問.2-2 どのような対応をすれば良かったか

(友蔵さん本人、息子夫婦・将棋仲間・近隣者・見守りボランティア・民生委員など周囲の人々)

1)見守りメンバー全体の意見傾向

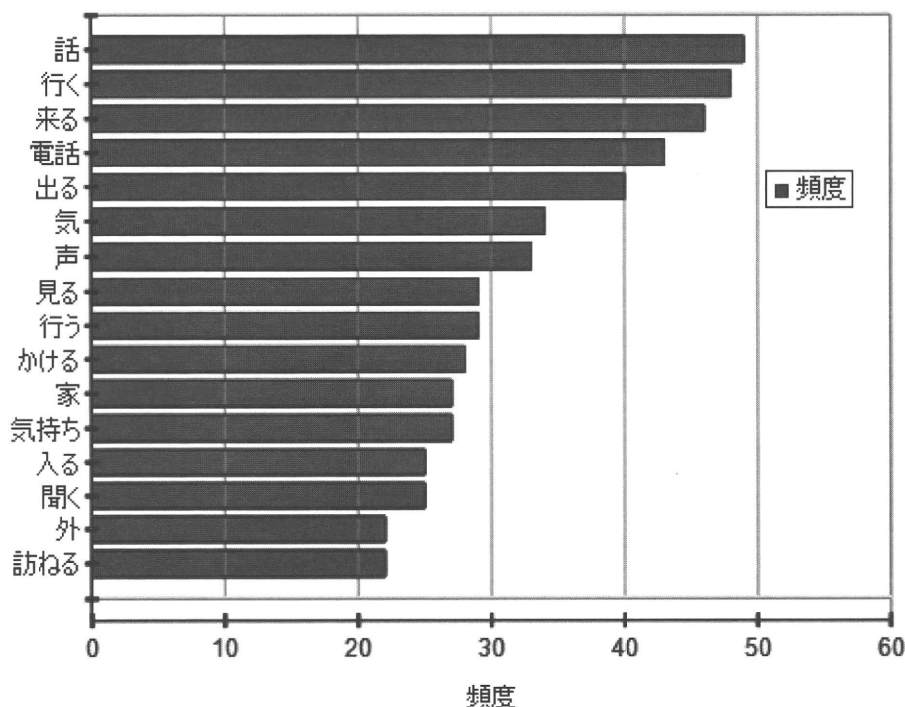


図 4 単語頻度解析：全体 (n=134)

- ① 周囲の対応としては、「家」を「訪ね」て「行く」、「電話」をするなど、「話」をすることが必要であったという回答が最も多く見られている(図 4)。

「電話」については、ある程度の様子が把握でき、毎日会話できると、その長所は認められているが、生活ぶりなど詳しいことはわからないので、時々「見に」行く・「訪ねる」ことが必要であるという意見が出されている。

- ② 友蔵さん(見守られる側)に望まれることとしては、「話し」ができる人を作っておく・「外」に「出る」よう心がけるなど、日頃から近隣や家族との人間関係を築いておく必要が挙げられている(図 4)。
その他、男性は「家」のこと(家事—特に料理)が苦手で、そのことも生活状態悪化の一因となりうるので、ある程度は自分で家事ができるようにしておくべきという意見も出された。

2)見守り専従の有無別にみた見守りメンバーの特徴

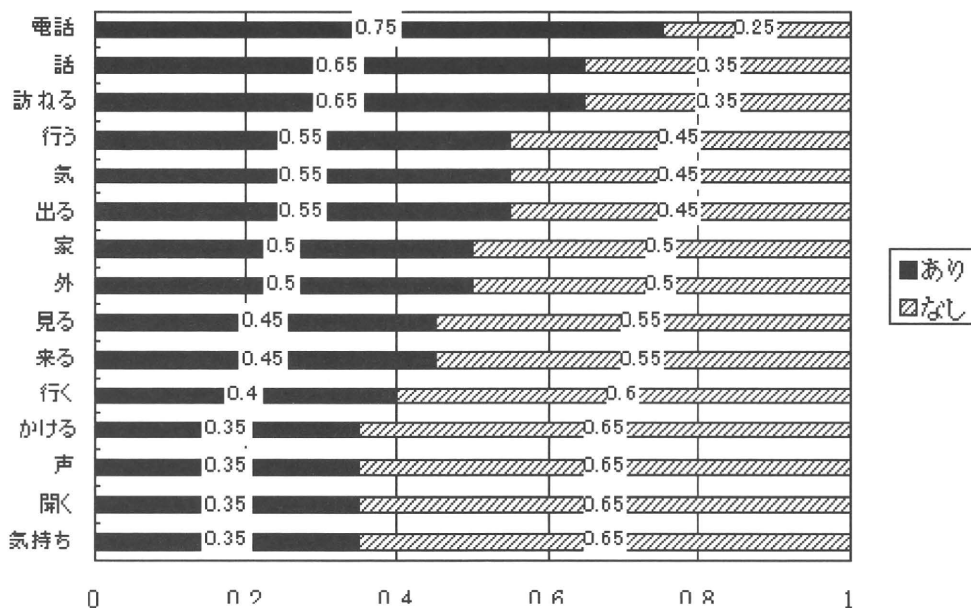


図5 単語頻度割合：専従有無別 (n=134)

【見守り専従がいる地区の特徴】

- ① 周囲の対応としては、「電話」「話」「訪ねる」が、多く発言されている(図5)。
「電話」については、家族や近隣者から見守り対象者に電話することが必要であること、しかし電話による情報収集には限界があるため、電話だけに頼らず「訪ね」て行くことが重要であるという意見が多かった。その他、「気になることがあれば、まず(別居している)家族に電話で知らせる。」という発言も見られた。
- ② 友蔵さんに対しては、若い頃から近隣にも知り合いや話せる人を作っておくこと、家族とは何でも話せる関係であること、近隣者から誘われれば応じて一步外へ踏み出すことが大切であると、近隣との関係作りに努めるべきだという意見が出された(図5)。

【見守り専従がいない地区の特徴】

- ① 周囲の対応として、「(見守り対象者の)気持ち」を「聞く」、「声」を「かける」という意見が多く挙げられている。そのタイミングとして、訪問・ゴミ捨てや外で会った時が挙げられている。男性は、誘っても老人会や集会になかなか足を運ばないが、趣味や娯楽でなく、むしろ「地区が、～～で困っているので助けてほしい」と頼んだほうが、近隣とのつながりが作られるのではないかという意見が出された(図5)。
- ② 友蔵さんに対しては、見守り専従がいる地区と同様の結果が得られた。その他には、高齢男性では家事が苦手な者が多いが、そのことで生活しにくくなることから、「男性も家事ができるようになっておくこと」を求める意見が出された(図5)。

Ⅱ 考察

1. セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか

メンバー全体の傾向として、「声かけ」「連携」「訪問」「話を聞く」が必要であるとの意見が多く挙げられている。

介護殺人を題材とした昨年度の研修でも、「声かけ」や、困難事例に対する「連携(や相談)」の重要性は既に指摘されていた。しかし、昨年度は、関わりが「声かけ」どまりであり、特に拒否的な対象者に対しては、何とか声かけができるようにという工夫や、生活状況(電気が点いているか・洗濯ができているか等)の確認のように、相手との距離感をもった関わりが挙げられていた。それに比べ今年度は、「話を聞く」「訪問」と、より深い関わりへと変化している。

さらに昨年度、「連携(や相談)」相手として挙げられていたのは、ケアマネージャー・行政・民生委員など、専門職を中心としたものであった。今年度はさらに「(見守り対象者の)家族」「見守りボランティア組織間」など、住民同士の協力が挙げられるようになってきている。見守りボランティアが、関わりの限界・困難さを感じれば、まずは自分たちで協力し、解決を図ろうとする体制が整いつつあることが窺われる。

これらは、住民意識の高まりや、見守りを通し近隣者の繋がり強化による変化ではないだろうか。

また、見守り専従の有無で比較すると、見守り専従がいる地区でのみ使用されている単語に「つきあい」、見守り専従がいない地区でのみ使用されている単語に「話」「あいさつ」が挙げられる。

見守り専従がいる地区では、「あいさつ」や「話」を聞く程度の関係から、一歩進んで「つきあい」の段階に関係作りが深まっているといえるのではないか。この他にも、関係作りの深さの違いを表す言葉に、見守り専従がいる地区で多く使用されている「おせっかい」がある。

特に、関わりを拒否する対象者の場合、繰り返し気長に関わり続けることで、少しずつ関係が築きつつあるという事例も話され、改めて「おせっかい」の意義が共通認識されていた。

高齢になれば、誰もが身体的・精神機能は衰え、外出の機会も少なくなる。そのため「単なる出不精なのか、セルフ・ネグレクトなのか、判断が難しい」との意見が挙げられた。そこでチェックシートの必要性についても言及されているが、「あいさつ」や「話」から一歩進んだ「つきあい」の中で、より有効な判断基準になると言える。

見守り専従は、高齢者を「見守る」という活動だけでなく、見守りボランティアや、地域住民の組織力を高め、地域のもつチカラをエンパワメントさせていく上でも有効だと考えられる。

2. ドラマティック・リリーフ体験後の話し合い

1) 友蔵さんのどんなところが気になったか(友蔵さんをどんな人と思うか)

友蔵さんを、「淋しい」人であると、否定的に捉える意見が多く挙げられた。「淋しさ」の原因として、①本人の特性によるもの:心を閉ざしている・プライドが高い・頑固・何もかも面倒くさくなっている、②家族や社会とのつながりの希薄さによるもの:訪ねてくれる人・話しかけてくれる人がいないという、両面から捉えられている。これらはまた、セルフ・ネグレクトを予防するために必要な要件とも言える。

また、セルフ・ネグレクトは突然おこるものではなく、いろいろなものを喪失していく経過の中で(家族など親しい者の死・疎遠な人間関係・詐欺・自身の身体的機能や気力の低下)、徐々に進んでいくものであることも指摘された。

友蔵さんに対し否定的な意見を述べながらも、「周囲にもこのような人は多い」「優しい言葉をかけられたり、話を聞いてもらえると嬉しい」などの発言もみられ、セルフ・ネグレクトは決して特別な人だけの問題でなく、誰にも起こりうる身近な問題であることが認識できたと考えられる。

2) どのような対応をすれば良かったか

・ 周囲の対応としては、上記「セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか」で得られた回答と同様、「話」をする一家に行って話をすると、昨年度以上に、深い人間関係を基盤とした対応が多く挙げられた。「電話」についても、「毎日、電話することが可能」「別居家族に電話して、対応を話し合う」「電話だけでは詳細な状況が把握できないので、実際に家に行くことも大切」など、離れたところにいる者との連絡・連携ができる利点を活かしつつ、訪問もあわせることで、より細かな見守りを可能にする対応が挙げられた。加えて、昨年との大きな違いとしては、「男性のプライドの高さ」を、むしろ長所と考え対応策が挙げられている点が挙げられる。昨年度は「男性はプライドが高い」ゆえに、「関わりにくい」「状況が把握し難い」とマイナス面ばかりがクローズアップされていた。今年度は「プライドが高い」のであれば、むしろそれを活かし「みんな(地域住民)を助けてほしい」と何かに理由付ければ、外へ出てみんなと関わりをもつのではないかという意見が出された。見守り活動を継続する中で、住民自身の対応能力が上昇しているのではないだろうか。また、『友蔵さんのどんなところが気になったか(友蔵さんをどんな人と思うか)』の話し合いでも挙げられたように、徐々にいろいろなものをなくし、次第にセルフ・ネグレクト状態に陥っていく。その過程を、別居家族・将棋仲間・近隣者各々は、一部ずつ把握するのみで、全体を把握している者はいない。セルフ・ネグレクト状態に向かう早期の段階でお互いに情報交換していれば、本人の状況・それによるストレスが予想でき、対策につなげた可能性もある。地域包括支援センターや見守り専従を中心とした連携・情報交換が強化されれば、見守り活動そのものの充実に加え、見守り対象者の把握にも役立つことが期待できると考えられる。

・ 友蔵さんに対しては、家族・近隣と良好な人間関係を築いておく、誘われた時には外へ一歩踏み出す、多少の家事はできるようになっておく等、日頃から心がけておくべきことが挙げられた。その他、話し合いの中で「夜間に、灯りがついているか見ようとしても、遮光率の高いカーテンを引いていて、まったく灯りが見えてこない家がある。」など、見守る側の限界を訴える声があげられた。今後は、見守る側の研修だけでなく、見守られる側に向けた研修や、中年世代を対象に見守りの必要性を周知する研修も検討していく必要があると考えられる。

3) 研修の有効性について

セルフ・ネグレクトに関するミニレクチャーを行い、その後にドラマティック・リリーフ体験を組み合わせた研修を行なった。グループインタビューの内容は次の①～③に整理された。

① 友蔵さんの心情・状況について理解することができた。

- ・ 友蔵さんは、口では「大丈夫」と言っているが、内心は「さびしい」と思っている。
- ・ 友蔵さんは、決して特別に誇張された人でなく、一般的な高齢男性であること、また誰もがこのような状態(セルフ・ネグレクト)になる可能性を持っている。

② 地域の見守りの必要性を理解することができた。

- ・ 別居家族(息子夫婦)にも、親族としての義務・責任はある。しかし、時間的・経済的に十分なゆとりがあるとは限らない。子どもや家族がいても、近隣での見守りが必要である。
- ・ 見守り対象者からの受け入れが悪い場合には特に、個人の生活に踏み込めない。しかし、一歩踏み込んだ「おせっかい」な関係が、人間関係のつながり・情報の共有化となる。

③ セルフ・ネグレクトについて具体的に理解することができた。

- ・ 住環境や身なりが不潔、人との交流を避け引きこもる、必要なサービスや医療を受けないなど、セルフ・ネグレクト状態の具体的生活状況を知り、見守る視点につなぐことができた。

- ・ セルフ・ネグレクトに陥るまでに、いくつかの要因(妻の死・囲碁教室でも友人ができない・詐欺にあう)があった。それらの情報を共有していれば、何らかのサインに気づき、早期に対応ができた可能性もある。連携・情報の共有が必要である。

平成 21 年度は、DVD を用いて「介護殺人」を通した研修を行なった。その内容は、単身男性が認知症となった母を 1 人で介護し、経済的に追い詰められた挙句に、心中をはかり、結果的に介護殺人となったという事例であった。昨年度と今年度(平成 22 年度)の研修での見守りのあり方や考え方を参加者のグループインタビューを比較検討、次の①～③に整理した。

①見守り対象と、係わりかた

- ・ 両年共に身体的、精神的、経済的に困窮していても、自ら訴えを起こせない人もいる。これらの人にはゆえに、近隣者から声をかけていく必要がある。
- ・ 今年度は、自らの訴えがないばかりでなく、自らは「大丈夫」と答えていても、実情では困窮している・淋しさを抱えている者もいることが認識されていた。
- ・ 今年度は、近隣者からの「声かけ」だけでは、相手の本心や生活状況を把握することは困難であるので単なる声かけだけでなく、「話をする」必要があることも認識された。

②セルフ・ネグレクトについての理解

- ・ 平成 21 年度は DVD を用いたことで、「事例を視覚的に理解でき、イメージしやすかった」という意見であったが、今年度はさらに自らが演じることで、より一層「セルフ・ネグレクトは、どこにでも見られる事例であり、自らもセルフ・ネグレクトになる可能性がある」と考えることができた。そのため昨年度に指摘された、高齢者夫婦世帯・中間独居・転入者などへの見守り対象拡大に加え、セルフ・ネグレクトへの見守りの必要性も認識することができた。

③専門職等や住民同士の連携

- ・ 平成 21 年度は、問題事例を早期に発見し対応するために、連携をはかる重要性は認識されており、行政や専門職との連携の重要性が挙げられていた。今年度は、さらに住民同士の連携が挙げられたことに加え、連携をはかることで早期発見・対応だけでなく、セルフ・ネグレクト状態に陥ることを「防ぐ」ことも可能であることが認識された。

ただ、「介護殺人」まで起こす事例は、一般的には極めて少数である。視覚に訴えても、イメージするには限界があったように思われる。一方で、セルフ・ネグレクトは誰にも起こりうる状態であり、見守りメンバーからも「近所にも、ここまでではないが同じような人がある」という発言も聞かれた。

セルフ・ネグレクトと介護殺人の研修の順を入れ替えても良かったかもしれない。

しかし、いずれにしろ、昨年度及び今年度の研修で、見守りを必要とする事例・見守られる側の心情や生活状態・見守りのあり方・連携について認識を深めることができた。

以上より、研修は有効であったと考えられる。

Ⅲ 21・22年度の研修の比較・検討

平成21年度・22年度に行なった研修について、比較・検討した。なお、平成20年度に一部行った地域の研修は内容が異なるため、検討から除外した。

1. 研修目的・方法

1) 研修目的と方法:ここに表で示す。

		平成21年度	平成22年度
目的		<p>①見守り組織メンバーに「高齢者の見守り」の必要性を再認識してもらう為の初期研修プログラムを作成し、見守り組織のあり方と必要性を理解してもらう。</p> <p>②「見守りチェックシート(案)」試行に向け、見守り組織メンバーに「見守りチェックシート(案)」の使い方について説明会を行い、見守りすべき高齢者の判断基準と、そのための「見守りチェックシート(案)」の必要性を理解し、試用してもらう。</p>	<p>高齢者のセルフ・ネグレクト及び孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について検討し、住民の主体的活動姿勢を引き出す。具体的目標は以下のとおりである。</p> <p>①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方について検討する。</p> <p>②セルフ・ネグレクト状態にある高齢者や周囲の者の状態を疑似体験することにより、より具体的に見守り活動の必要性や、地域でのネットワーク構築の必要性を検討できる。</p>
方法	対象	平成20年度にアンケート調査に協力いただいた各地区の見守り組織メンバー及び、関係する保健医療福祉職従事者を対象とした。人数は、H市16名、Se市33名、Ka市A地区12名、Ka市B地区13名、K市A区42名、K市B区33名、G村31名、S市92名、合計272名である。	今年度、アンケート調査に協力いただいた、各地区の見守り組織メンバー及び、関係する保健医療福祉職従事者を対象とした。人数は、H市12名、Se市33名、K市A区42名、同B区31名、G村16名、合計134名である。
	時期	平成21年6月～同年12月	平成22年8月～同年10月
	内容	DVD『介護殺人:防げなかった親子心中』を鑑賞後、グループワークでの意見交換を行なった。 (内容の詳細については、表1-1および1-2を参照)	ドラマティック・リリース体験を行い、その後グループワークでの意見交換を行なった。さらに、研修会後に、参加者全員から『セルフ・ネグレクト(自己放任)研修アンケート』を記載・回収し、「セルフ・ネグレクト状態の人を地域で支えていくにはどうするか」について自由記載により回答を得た。 (内容の詳細については、表2-1および2-2を参照)
	分析	グループワークの発言を録音することに関し同意を得られた対象者には、ICレコーダーで録音したものから逐語録を作成した。録音に同意を得られなかった対象者、もしくは録音した音声聞き取りにくい場合には、議事録をもとに発言内容をまとめた。	『セルフ・ネグレクト(自己放任)研修アンケート』より、「セルフ・ネグレクト状態の人を地域で支えていくにはどうするか」についての自由記載については、記載文そのままを一括しまとめた。
		得られたデータは、テキストマイニングツールであるText Mining Studio3.1(数理システム)により分析を行なった。	

2) - 1. 平成 21 年度研修内容

表1 研修会の構成

時間	内容
10分	オリエンテーション
15分	DVD鑑賞「介護殺人:防げなかった親子心中」
10分	グループワーク
5分	討議内容発表
10分	グループワーク
10分	討議内容発表

表2 DVD『介護殺人:防げなかった親子心中』とグループワークの内容

父親の死後、10年以上にわたりK被告は工場で働きながら母親の介護に努めていた。近所の人々は、母親の手を引いて散歩する姿や、一緒に買い物する姿、おむつを抱えたK被告の姿をよく見かけていた。

ある日、母親が急に倒れ緊急入院後、認知症が進行し、退院後にも徘徊することが多くあり、K被告が仕事にも「母を保護した」と警察から呼び出しを受けることがしばしばみられた。

しかし、近所の人々はK被告が困っていることを知らなかった。K被告の母親は、地域の民生委員の支援対象に入っておらず、民生委員が関わることもなかった。介護保険サービスを利用しようとも経済的に困窮し、K被告は母の介護で一睡もできない日が続いた。

ついに介護に追われるK被告は、仕事を続けられなくなったが、生活保護の申請に対しても十分な対応をしてもらえず、生活苦に加え、「(生活保護の)申請ができない」との思いもあり、母親との心中を決心した。

グループワーク

①見守り組織が現実には機能していなかった、なぜだろう。

(DVD提示事例のK被告が周囲に助けを求められなかったのはなぜか)

②自分たちが所属する見守り組織内での出来事であったら、どう対応できるか

(K被告が、自分たちの隣人であったらどう対応できるか)

2) - 2. 平成 22 年度研修内容 (pp35:表1、表2を掲載し、内容を紹介している。)

2. 結果

1)見守り対象者をどうとらえるか(高齢者見守りの必要性について)

見守りの必要性に関しては、平成 21 年度の「見守り組織が現実には機能していなかった、なぜだろう(K被告が周囲に助けを求められなかったのはなぜか)」、22年度の「友蔵さんのどんなところが気になったか」のグループワークにおける、『見守り対象者のとらえ方』を以下に示す。

① 平成 21 年度

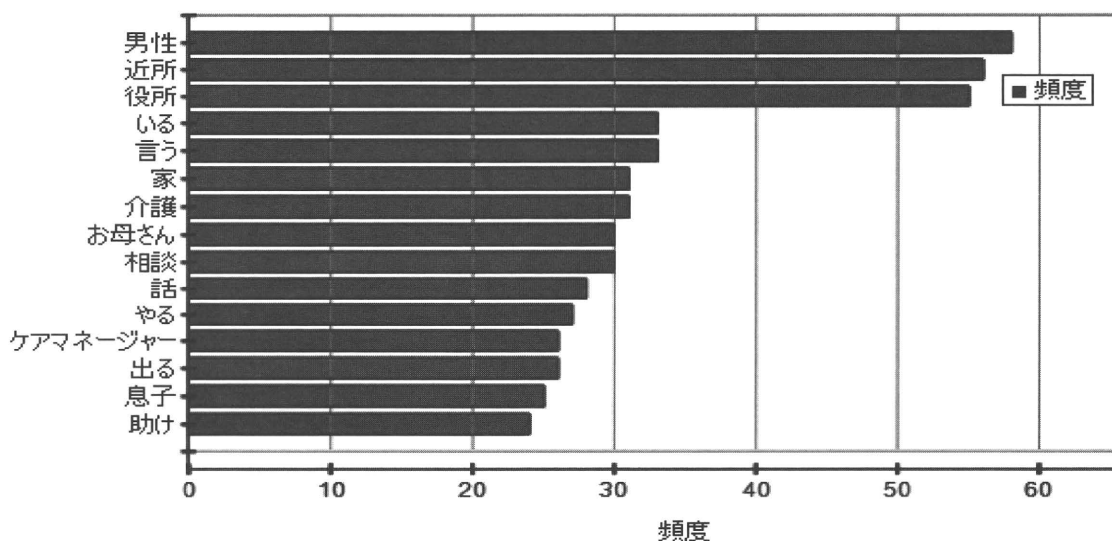


図1 単語頻度解析：全体 (n=272)

「見守り組織が現実には機能していなかった、なぜだろう(K 被告が周囲に助けを求められなかったのはなぜか)」については、介護者が「男性」であったこと、「近所」との人間関係が希薄であったこと、「役所」の対応が不十分であったことなどが挙げられた(図1)。

介護者が「男性」であった場合には、困ったことがあっても人に言えない・近隣者からも声をかけにくく、近所付き合いが持ちにくいという意見が多くみられた。また、困ったことがあっても人に言えなかった理由としては、プライドが高い・遠慮がある・もともと仕事中心の生活で近所付き合いがなく話し相手がいなかった・年代的に(50 歳代)人に頼ることを良しとしない傾向がみられること等が挙げられた。

② 平成 22 年度

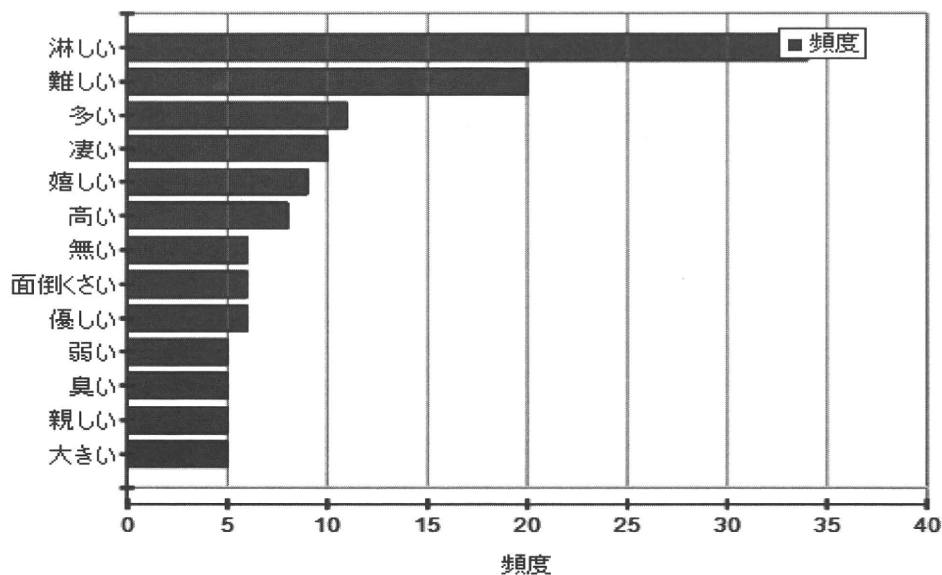


図2 単語頻度解析：全体 (n=134)

「友蔵さんのどんなところが気になったか」というところから、見守り対象者(友蔵さん)をどのように捉

えているかについて意見を求めたところ、最多であったのは「淋しい」人というとらえ方であった。淋しさの要因としては、個人の性質・家族や近隣者との関係が疎遠で、話し相手さえいない状況であることが挙げられた。プライドが「高く」「面倒くさがり」で、関わり方が「難しい」と、否定的にとらえられているが、こういう男性は「多い」と、身近なケースと重ね合わせながら、決して特殊な事例ではないことが指摘された（図2）。

2) 見守り組織のあり方について

平成 21 年度の、「自分たちが所属する見守り組織内での出来事であったら、どう対応できるか(K 被告が、自分たちの隣人であったらどう対応できるか)」についてのグループワークから、22 年度は「セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか」についてのアンケート結果と、「あなたが、<友蔵さん本人><息子夫婦><囲基教室の仲間><近所の人><民生委員や見守りボランティア>ならどのような対応をすればよかったか」についてのグループワークから、『見守り組織のあり方』についての意見を以下に示す(図3)。

(1) 見守り組織メンバー全体の意見傾向

①平成 21 年度

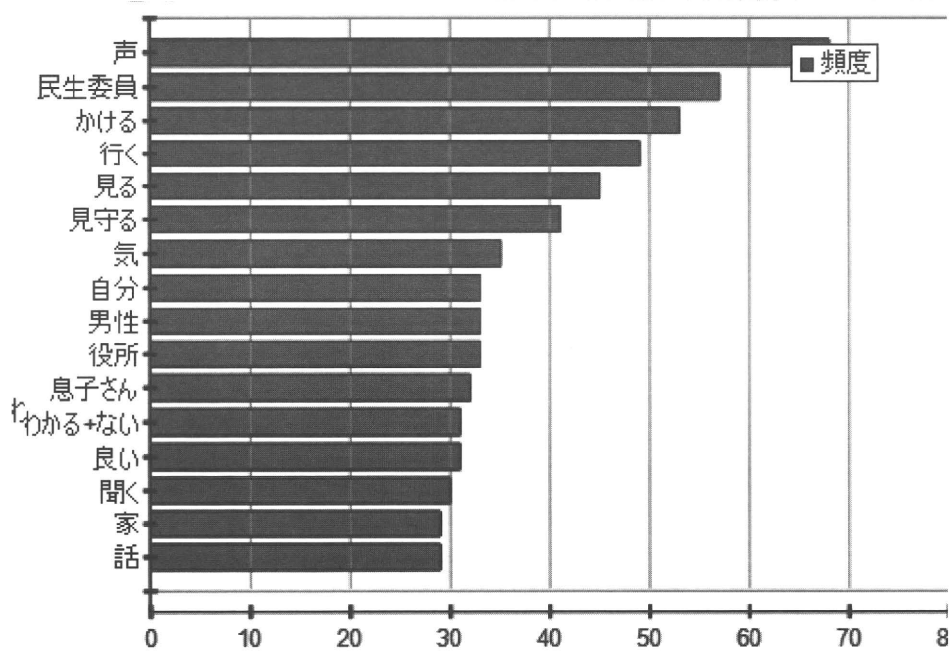


図3 単語頻度解析:全体(n=272)

「自分たちが所属する見守り組織内での出来事であったら、どう対応できるか」については、「声」を「かける」、「民生委員」に伝えるという回答が多くみられた。外で「見」たら(見かけたら)声をかけたり、特に相手が見守りに対し拒否的な場合は、外から様子をうかがうなどの方法で「見守」っているが、生活の内情までは「わからない(わかる+ない)」ため、対応が困難であるという意見も出された。「男性」に対しては、元から近所とのつきあいが少ない場合も多いこと、何を話したらよいかわからないことなどから、関わり方の難しさを指摘されていた。また、独居高齢者・高齢者世帯のみを見守り対象としている地区もあり、対象者の拡大の必要があることにも言及された(図4)。

②平成 22 年度

セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか

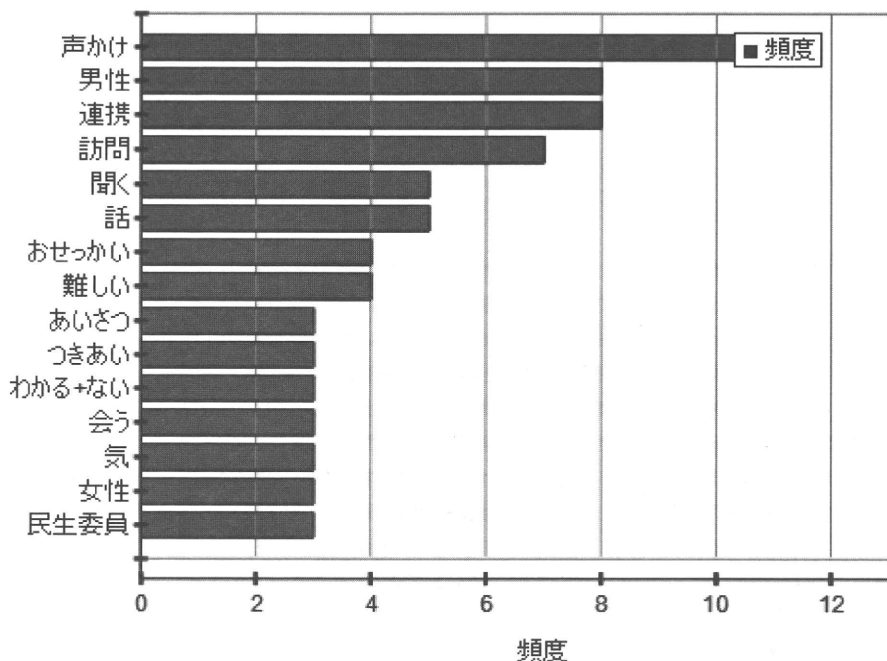


図4 単語頻度解析:全体(n=134)

あなたが友蔵さん本人<息子夫婦>...だったら、どのように対応すればよかったか

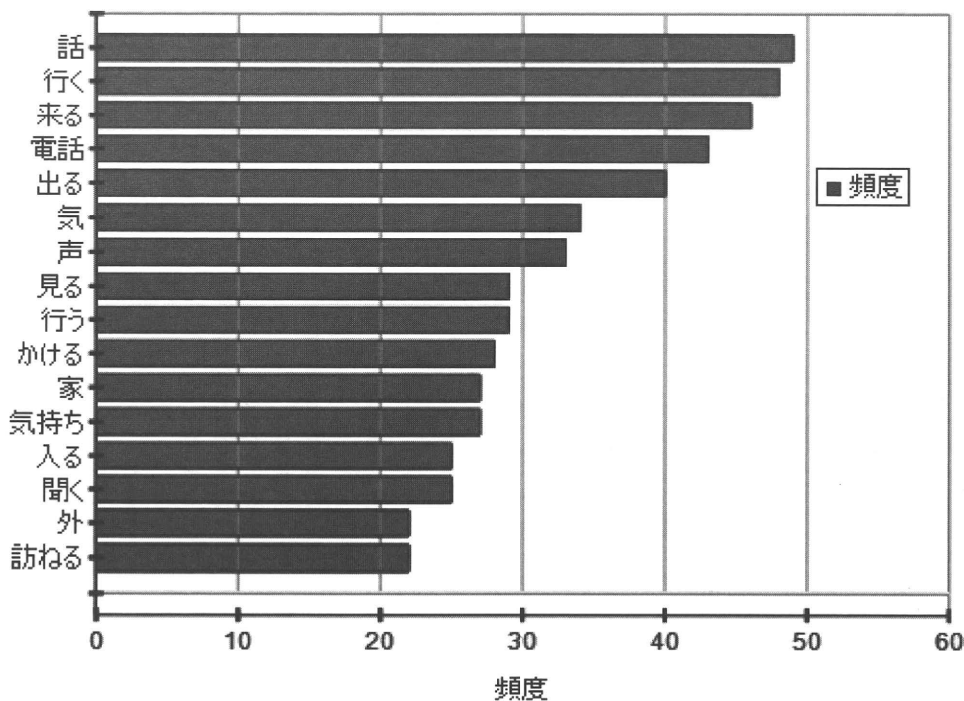


図5 単語頻度解析:全体(n=134)

「声かけ」「連携」「話をしに行く(訪問含む)」「電話」という回答が多くみられた。連携先としては、行政や専門職の他、見守り組織同士・メンバー同士などが挙げられた。電話については、「見守り対象者の家族に電話する」と、離れたところに住む家族への連絡・連携方法として使用する意見が多かった。

相手から拒否された場合の見守りの難しさに言及する意見もあったが、「おせっかい」でも関わっていく必要があるとの意見が出された。「男性」はプライドが高い・近所付き合いが少ないなど、見守りの困難さがあると認めながらも、プライドの高さを利用した関わり方があるという意見も出された(図5)。

(2)見守り専従の有無別にみた見守りメンバーの特徴

①平成 21 年度

自分たちが所属する見守り組織内での出来事であったら、どう対応できるか

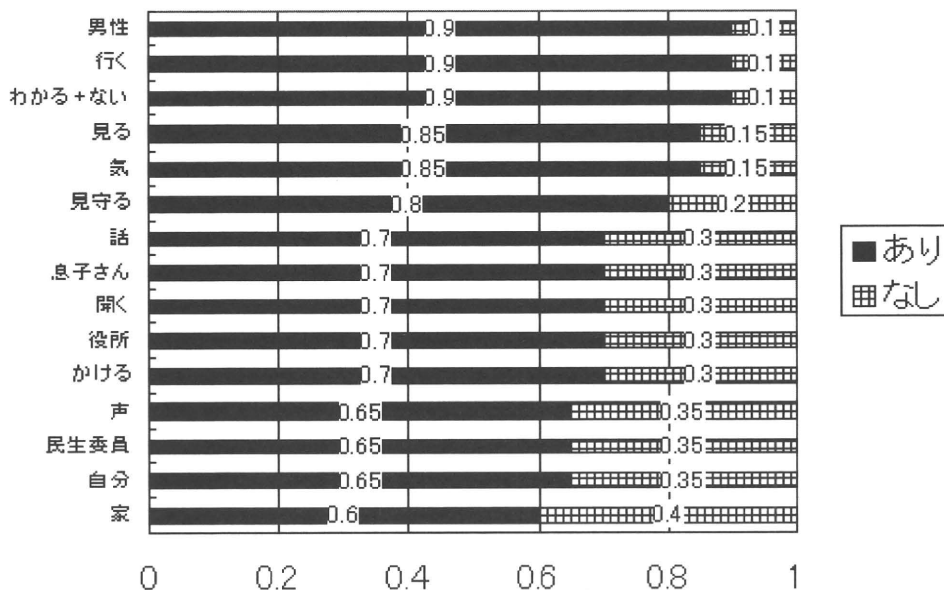


図6 単語頻度割合:全体(n=272)

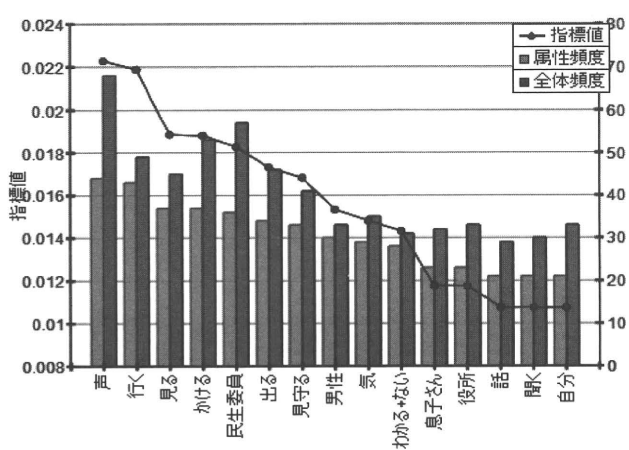


図 7-1 特徴語抽出:見守り専従あり (n=120)

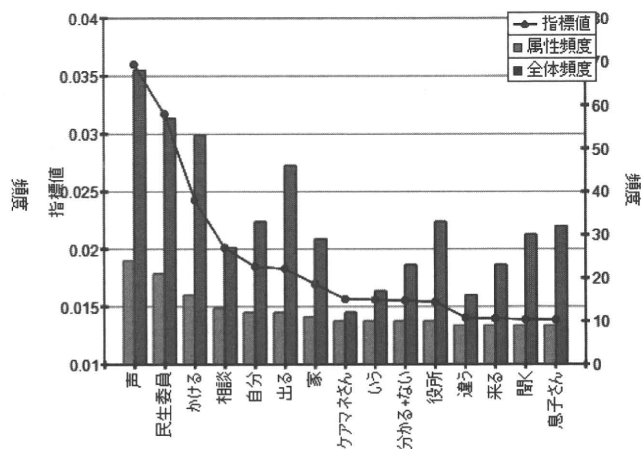


図 7-2 特徴語抽出:見守り専従なし (n=152)

【見守り専従がいる地区】

「声」を「かける」・様子を「見に」「行く」ことが挙げられており、「民生委員」については、見守り組織メンバーだけでの対応が困難な場合に連絡・連携をはかっており、「まず民生委員に相談する。そこから必要なら地域包括支援センターに相談する」と、連携システムが構築されていることが伺われる発言がみられた(図6, 7-1)。

【見守り専従がいない地区】

「声」を「かける」ことが第一に挙げられた。「民生委員」については、「民生委員が自ら見守り訪問をしている」「困ったら民生委員に相談することも知らない住民もいる」「民生委員が何をしているか、わからないと言っている住民もいる」など、地区により民生委員の活動内容にばらつきがあることが示唆された内容が見られた(図6,7-2)。

②平成 22 年度

セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか

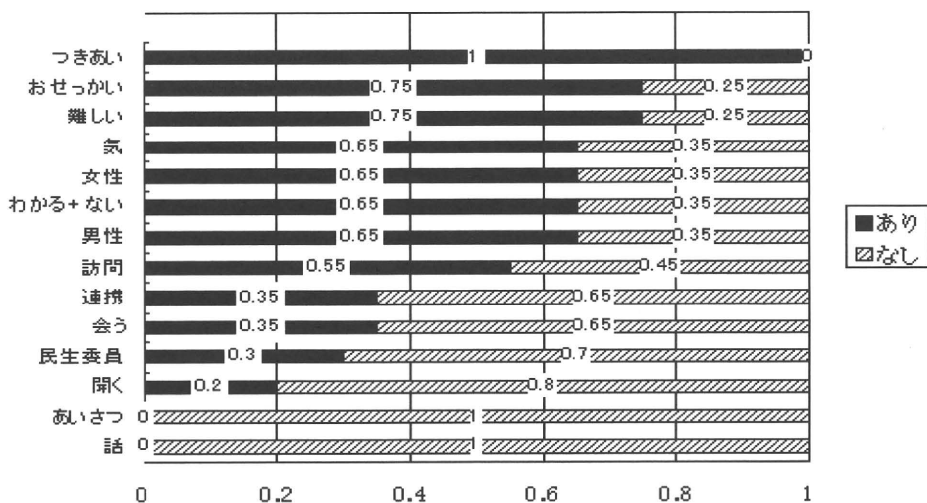


図8 単語頻度解析:全体(n=134)

あなたが<友蔵さん本人><息子夫婦>・・・だったら、どのように対応すればよかったか

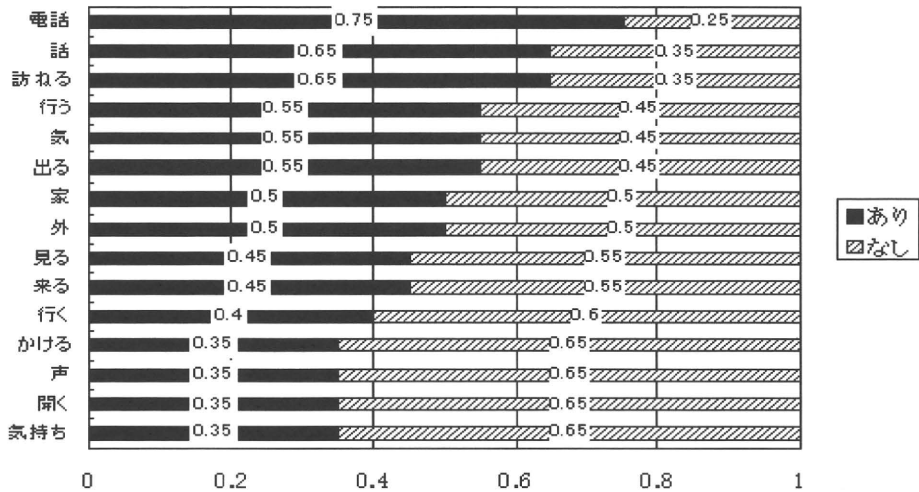


図9単語頻度解析:全体(n=134)

【見守り専従がいる地区】

周囲:日頃から近隣や家族(別居家族含め)との「つきあい」を持っておくことが重視されていた。具体的には、「電話」をする、「話」をする、「訪ねる」という方法が挙げられており、「おせっかい」でも繰り返し気長に関わることで関係が築かれるという発言もあり、継続の重要性も指摘された。

友蔵さん本人:日頃から近隣や家族と、何でも話せる関係を作っておくこと、近隣者から誘われれば応じて一歩外へ踏み出すことが大切であると、近隣との関係作りに努めるべきだという意見が出された(図8)。

【見守り専従がいない地区】

周囲:「(見守り対象者の)気持ち」を「聞く」、「声」を「かける」、「話」をする、「あいさつ」をするという意見が多く挙げられている。声かけや話をする機会として、ゴミ捨てや外で会ったとき等が挙げられている。男性には、趣味や娯楽でなく、「地区が、～で困っているので助けてほしい」と頼んだほうが、近隣とのつながりが作られるのではないかという意見が出された。また民生委員に寄せる期待は大きく、「民生委員が再教育や研修を受け、近隣者と連携をはかり、地域活かしていくことが課題」という発言が見られた(図9)。

友蔵さん本人:見守り専従がいる地区と同様の結果が得られた。その他には、「男性も家事ができるようになっておくこと」を求める意見が出された(図9)。

3. 考察

1) 見守り対象者と高齢者見守りの必要性

○年度による比較

・平成21年度の研修で、「見守り組織が実際には機能していなかったのはなぜか」と問いかけたところ、最も多く挙げられた意見は「男性への関わりの難しさ」であった。男性に対するイメージが‘人に(自分が置かれておる状況や困ったことを)言えない’‘プライドが高い’‘遠慮がある’‘仕事中心で生きてきて、近所とのつきあいがいいがない’という言葉で表わされていた。今回は介護者が男性であったことも要因となり、『男性』という言葉でまとめられたが、男性に限らず、前記のような条件をもつ人であれば、男女問わず関わりの難しさから孤立していき、見守り活動が機能しない危険性は高いと思われる。とりわけ近所との人間関係の希薄さは、住民の孤立につながり、見守り組織が機能しない一因となったことは認識されていた。加えて、役所からの説明不足がさらに孤立感を高めていくことも指摘された。以上より、21年度の研修では、

- ① 自分が困った状況にいることを、周囲に話せない者もいること
- ② それに対し、周囲が関わり難さを感じ疎遠になっていくことで、近隣との人間関係はいっそう希薄になること
- ③ さらに役所の説明不足などの要因が重なると、ますます孤立感を高めていくこと

が認識され、見守りの必要性が肯定された。

・平成22年度も昨年同様、‘プライドが高い’‘面倒がり’など、見守り対象者の性質や生活状況から、関わりの難しさが指摘されたが、そのような性格や、近隣や家族との関係が希薄な状況は「淋しい」と、相手の心情を考えることができた。また、ドラマティック・リリーフ体験を行ない自ら演じることで、徐々にいろいろなものをなくしていき(家族の死、近隣者とのつながりの希薄さ、詐欺など)セルフ・ネグレクト状態に陥っていく経過が実感され、このような状況の人は「多い」と、実際の地域住民をイメージしながら捉えることができた。以上より、22年度の研修では

- ① 自分が困った状況にいることを話せない者も、内心は淋しく思っていること
- ② その淋しさの原因は、性格・周囲との人間関係の希薄さや孤立した状態であること
- ③ そのような状況は、誰にも起こりうること
- ④ セルフ・ネグレクトの生活状況
- ⑤ 徐々にセルフ・ネグレクト状態に陥る場合、情報を共有し、連携をはかることで早期発見・早期対応につながる可能性があること

が理解され、対象者の心情にまで踏み込んで見守りへの認識を深めることができたといえる。

2) 見守り組織のあり方について

○年度による比較

・平成21年度は「自分たちが所属する見守り組織内での出来事であつたら、どう対応できるか」に対して、「外で出会ったとき等に声をかける」との回答が多く見られた。声かけは、近隣とのつきあいの第一歩とも言え、人間関係が築かれつつあることが伺われた。しかし、お互いの距離感をもったままのつきあいであり、研修での事例(K被告)のように男性や、拒否的な者、従来から近隣と良好な人間関係を築いていない者に対しては「関わりが難しい」と考えられていた。そのような者に対しては「洗濯物が干してあるか」「夜に電気が点くか」など、外からでも可能な見守り方法が提案された。また、独居高齢のみを見守り対象としている地区も見られたが、「それでは、このK被告のような場合には対応できなかった」という意見が出され、見守り対象を広げる必要が示唆された。以上、21年度の研修からは

- ① 近隣からの声かけは、見守り活動の第一歩となること
 - ② 拒否事例など関わりが難しい者の見守りには、外からの確認が有効であること
 - ③ 見守り対象者の拡大(独居高齢者・昼間独居・転入者・核家族高齢者等)が必要なことが認識され、見守り活動の再考し、(外からの見守りにも対応できるような)チェックシートの必要性を理解することができた。
- ・平成 22 年度には、「セルフ・ネグレクト状態にある人を地域で支えていくにはどうするか」「あなたがく友蔵さん本人×息子夫婦・・・だったら、どのように対応すればよかったか」という問いに対し、「声をかける」という回答が多いのは昨年度同様であったが、さらに「話しに行く(家を訪ねて話す)」という回答も多く見られた。「電話をする」という回答も多かったが、これは決して相手との疎遠さを表すものでなく、「電話なら毎日でもできる」「(別居しているが、緊急連絡先となりうる)見守り対象者の家族に連絡する」という利用であり、対象者本人だけでなく家族を含めた密接な関わりを意味していると考えられる。また、連携の必要性についての意見も多く出された。昨年度も民生委員を中心として、地域包括支援センター・ケアマネジャーといった専門職への連絡については意見が出ていたが、22 年度はさらに見守り組織間・見守り組織メンバー同士など、住民間での連携が加わった。これらは、近所つきあいを基盤とした見守り活動が築かれつつあることを示唆するものと考えられた。22 年度においても、プライドが高い・近隣とのつきあいが少ない等の対象者には「関わりにくい」という意見が出されたが、昨年は「関わりにくいから、外から見守る」と、やや消極的ともいえる見守り方法が挙げられたのになら、'おせっかい'でもいい、関わってほしい」「プライドが高いなら、むしろそのことを利用して地域とつながってもらおう」と、積極的な見守りへと変化した。それにあわせ、チェックシートの必要性も、昨年度の「外からの見守りにも対応できるチェックシート」から、「単なる性格や出不精か、セルフ・ネグレクトかを区別できるチェックシートが必要」という発言がみられた。以上より、22 年度の研修では
 - ① 近隣とのつきあいを基盤とした、より踏み込んだ見守りが必要であること
 - ② 拒否的な者に対しては、「おせっかい」な関わりが必要であること
 - ③ プライドが高い等、近所付き合いを困難にさせる要因に対しては、逆にそれを利用して関わりを作っていく可能性があること
 が認識され、有効な研修であったと考えられた。

○見守り専従の有無による比較

- ・見守り専従がいる地区は、21 年度は「声かけ」「(家に行く)ことが大事である」という回答が多かった。22 年度は「単なる声かけ」から、「話をする」「訪ねる」と、一歩踏み込んだ見守り活動が行なわれていることが伺われた。また「息子夫婦に電話して、相談する」など、対象者の家族を含めた見守り体制作りもなされていた。見守りに対し拒否的な者には「おせっかい」でも気長に継続して関わっていくという発言がみられた他、見守りボランティアでの対応が困難であれば民生委員に相談、そこから地域包括支援センターと連携をはかるといったように、見守り活動を通じた地域づくり・システム作りが行われていた。
- ・見守り専従がいない地区では、21 年度は「声かけ」「民生委員に伝える」と回答する者が多かった。22 年度は、外出時や(ごみ捨て時など)ちょっとした機会をとらえて「挨拶する」「声をかける」・「話を聞く」という回答が多かった。関わりを持つ機会は増えたが、外出先などでは個人にかかる詳細な話を聞くには無理があり、つきあいの深さは決して深まっていないことがうかがわれた。また民生委員に対する期待は大きく、「研修を受けて、見守りボランティアのリーダー的役割をこなしてほしい」という意見がみられた。見守り専従がいない状況では、時に過重な負担を民生委員に強いる可能性もある。

民生委員での対応が困難な場合など、地域での見守りシステムを構築していく必要が考えられた。

4・まとめ

1) 研修について

(1) 研修の効果について

21年度・22年度と研修を行い次の9点が抽出された。

- ・ 見守りの必要性が認識された。
- ・ 見守り対象者の拡大の必要性が認識された。
- ・ 近隣との人間関係が築けない者の孤独さ・寂しさが理解できた。
- ・ 拒否事例に対して外からの見守りも有効であることが認識された。
- ・ 拒否事例にはまた、おせっかいに関わっていく・近隣との関係を阻んでいる事象を逆に利用して人間関係を築いていく必要があることが認識された。
- ・ 近隣との人間関係が築かれ、一歩踏み込んだ見守りが行なわれるようになった。
- ・ 一歩踏み込んだ見守りにはつながりにくい場合も、見守りの機会が増えた。
- ・ 専門職との連携だけでなく、住民同士の連携の必要性について認識できた。
- ・ チェックシートは、見守りの際の視点を明らかにし、専門職へつなぐ・情報を共有するためにも必要であることが認識された。

以上の内容から、本研修は効果的であったといえる。

(2) 研修のあり方について

参加者からは「DVD視聴により、事例理解がしやすかった」「ドラマティック・リリーフ体験で、自ら演じることで、「見守られる側」の気持ちなることができた」「具体的な事例を挙げてもらえると、イメージがつきやすく、わかりやすい」という意見が出された。

21年度は、「介護殺人」という非常に重い題材であり、「うちの地区にはない」「ここまで悲惨なことは起こらない」という意見が見られた地区もあった。逆に22年度の「セルフ・ネグレクト」では「こんな人、近くにいる」という声が挙がり、研修の順序が逆でもよかったのかも知れない。

研修できる日時に限りがあり、ある程度の大人数での研修会の開催であったが、「もっと地元で、少人数での研修を開いてほしい」という意見もみられた。グループワークやドラマティック・リリーフ体験などでは、一定の人数が必要となるが、ある程度の人数を確保した上で、小集団を対象に、より地域に密着した研修が今後開かれていくことも必要であると考えられる。

2) 見守り専従について

見守り専従の有無別に地区を比較したところ、見守り専従がいる地区では次の2点が抽出された。

- ・ より踏み込んだ見守りがなされていた。
- ・ 住民(見守りボランティア)だけでの対応が困難な場合の見守りシステムが構築されていた。

逆に見守り専従がいない地区では次の点が抽出された。

- ・ 民生委員に期待が寄せられ、過重な負担になることも懸念された。

以上の内容から、見守り専従は、単に見守りを行なうだけでなく、見守りを通して、地域の人間関係の構築、システム作りにも有効であることが示唆された。

第4章 先進的見守り組織・活動実践地域の視察

平成21・22年度視察の見守り先進地域の組織発展過程を分析し、新たな見守り組織構築への具体的な示唆を得ることを目的に、高齢者虐待防止(セルフ・ネグレクト防止・認知症高齢者見守り活動)に取り組む組織構築過程を行動変容モデル(The Transtheoretical Model)の5つのステージに整理した(図10)

展開	志摩市 (経済虐待早期発見まちづくり)	羽曳野市A地区 (独居高齢者見守りまちづくり)	大牟田市 (認知症早期発見まちづくり)	学 び
無 関 心 期	高齢人口:17,700人 高齢化率30.1 地域包括支援センター職員の、高齢住民への相談に、即応に訪問対応	高齢人口2,670人 高齢化率26.4 民生委員リーダーの独居高齢者問題対処への熱意「緊急SOSカード」作成、配布	高齢人口:17,700人 高齢化率30.1 デ・マークで研修を受けた施設リーダーを中心に全市内施設職員への質向上研修の実施	高齢化率、高齢独居率共に周辺地域に比べ高い
関 心 期			市内介護支援専門員連絡会設立 認知症ケア研究会会員通信「ファンジン」発行	専門職リーダーによる、住民・専門職・関係者等から信頼を得る活動実践 関係者の出会いづくり 関係者のグループづくり
準 備 期	市担当課及び直営地域包括支援センター共同による関係組織、住民への実態調査の実施	連合町会と民生委員共同し、地域内全高齢者世帯への実態調査の実施	市担当課と介護事業者協議会共同し、市内全世帯及び施設に対し、認知症実態調査実施	市担当部・課と共同し高齢者問題実態調査実施、認知症・独居等高齢者問題把握
実 行 期	市広報誌で実体調査結果と高齢者・家族問題及び、地域支援課題を住民に報告	回覧板により住民に実体調査結果と高齢者・家族問題及び、地域支援課題を報告	市広報誌で実体調査結果と高齢者・家族問題及び、地域支援課題を住民に報告 施設職員へは研修会等を実施して報告	調査結果の住民・関係者へのフィードバック 高齢者の課題情報は行政・事業者(専門職含む)・住民の三者が共有
	・専門職向け研修と各種検討専門委員会発足 ・住民教育シリーズ開始(虐待事例シナリオ作成使用)	・独居高齢者サポートグループ開設 ・行政と共同「地域リハビリテーション推進事業」実施	・町内会と共同、地域内危険カ所マップ作成 ・認知症ケアサポーター養成に向け準備作業に取り組む ①早期発見・支援ハンドブック作成 ②絵本『いつだって心は生きている』	行政・事業者・住民代表の三者による研修、啓発事業企画と事業開始
	・行政職員研修 ・専門家研修 ・金融機関職員研修 ・商店街店主・店員研修 ・町内会研修など ・小中高校生対象研修	住民主体ボランティア独居高齢者支援組織「羽曳が丘ゆうゆうクラブ」開始		
維 持 ・ 発 展 期	・支援・介入専門家チーム体制構築	羽曳が丘まちづくりの会誕生	もの忘れ相談健診、相談医、かかりつけ医制度	認知症早期発見・対処システム構築
	・見守りボランティア登録 ・見守り希望対象者登録			住民見守り組織構築
	・住民見守り組織構築	NPO法人「羽曳が丘E&L」誕生。生活部、環境部、管理部で構成 ・ゆうゆうクラブ ・まちづくりの会 ・町会連合会 ・ピオトップクラブ ・見守りネットワーク ・子育て支援・交流	・まちぐるみで「徘徊模擬訓練」に取り組む ・小中高校生等の認知症高齢者サポーター養成講座「絵本教室」に取り組む	見守りボランティア及び見守り希望対象者確保
	・住民主体の見守り組織育成研修実施 ・住民主体新規ボランティア()育成研修実施		校区民生委員による見守り訪問活動組織構築誕生	住民主体の認知症・セルフネグレクト防止見守り組織や見守りボランティア育成の啓発教育事業開始
	住民用高齢独居・認知症見守りチェックリスト作成			小中高校生等も含む町ぐるみ認知症高齢者等見守りサポーター養成

図10 高齢者見守り住民組織及びまちづくり構築過程

<無関心期>

- ・ 問題意識と熱意を持った専門職リーダーの出現
- ・ 対象地域の認知症や独居高齢者の健康や生活課題、および特徴を探る情報収集作業
- ・ 困っている人達の声を聞く活動(高齢者と家族、民生委員、高齢者サービス提供者、高齢者問題相談窓口職員など)
- ・ 困っている人達の状況に即時に反応・行動し、信頼を得る活動実践

<関心期>

- ・ 困っている人達(高齢者と家族、介護・医療等専門職、高齢者サービス機関老人クラブ、町内会、商店会、警察、消防、交通機関、金融機関など)が出会う場の確保
- ・ 出合いの場の参加者達の情報交換と相互理解を促す
- ・ 関係者によるグループづくり、関係組織づくり

<準備期>

- ・ 行政、民間事業者、住民ボランティア三者の共通理解に努める
- ・ 共通の問題に気づき、三者共通の目標設定、優先順位、役割分担を行う
- ・ 三者共同による実態調査の実施。併せて多方面から高齢者問題把握する

<実行期>

- ・ 実態調査結果を住民及び関係者にフィードバックする
- ・ 実態調査結果等より解決すべき課題を行政、民間、住民が共有・理解する
- ・ 行政、民間事業者、住民等それぞれが担うべき研修・啓発事業を企画・事業実施
セルフ・ネグレクト高齢者防止事業(地域内危険箇所マップ)
- ・ 認知症、独居見守り予防事業(見守り組織の構築、)
- ・ 見守りボランティア育成、見守り希望高齢者の登録増加
- ・ 新たなる見守りボランティアの育成研修・啓発事業

<継続・発展期>

住民主体の参加事業は参加意欲が高まる内容である(楽しく・共感的、個人にも知的利益がもたらされる)

- ・ 小中高校生等も含む町ぐるみ認知症高齢者等見守りサポーター養成事業
- ・ 住民主体による町ぐるみ認知症高齢者等見守り組織メンバー育成研修プログラム等の実施
- ・ 住民のNPO 法人等による生活、環境、福祉サービス事業の実施
- ・ 行政中心事業から役割の委譲

<まとめ>

視察した4地域の専門職は、見守り組織の構築過程に意図的に関わり、情報収集や住民と関係機関が交流する場を設けながら共通問題を明確化し、その解決に向かって相互的な支援関係が築けるよう働きかけ、その結果、先駆的な活動と認められる組織構築に至っていた。

地域で働く専門職は、包括的継続的支援が可能となるような地域包括ケアシステムの整備に向けて働きかけを行い、その役割には地域住民組織等のインフォーマルな組織とのネットワークを築くことも含まれている。これらのネットワークは、地域に潜むリスクを抱える高齢者の見守りや早期発見ができ、フォーマルサービスでは行き届かない部分に支援やサービスを行渡らせ、互いに補完しあうことができる点で有益であるといわれており、4地域は高齢者にやさしい、安全なまちづくりに繋がっていた。

視察4地域から、活動過程を行動変容のステージモデルに沿って分析し得られたヒントは、これから高齢者見守り組織づくりに取り組む市町村や活動が難航している地域の活動促進の参考になると考える。

第4章まとめ・提言

昨年に引き続き今回も調査対象とした全地域で行った見守り組織メンバーへの研修成果、全地域で行った見守りチェックリスト(案)等の数量データ(第2章 結果・分析記載)と見守り組織メンバーに行ったインタビューによる逐語録データ(第3章 結果・分析記載)の成果に、さらに今回の9都市区町村別の分冊報告書の具体例等を加えてまとめた。

I. まとめ

1. 住民ボランティア用の見守りチェックリスト(案)の作成と試行

1) 見守りチェックシート(案)試行の良・否についての意見

(1) 見守りチェックリストは「必要・良かった」の意見

- ・ 全ての見守り組織から、チェックシートは見守りポイントが分かりやすいので必要との意見であった。
- ・ チェックシートがあることで今までとは違う視点で、対象者宅に行くことができる。何も目的なく、見守り宅への訪問は難しい。チェックのための訪問で必要性を感じ、日常生活の観察・把握すべき視点など、見守りの際に見落としはならない項目がわかり便利である。
- ・ 見守り組織メンバーにとって、見守りチェックシートの実施は見守り時の判断基準の教育となった。チェックのための訪問がきっかけとなり、地域の見守りシステムにつながった事例などもある。
- ・ 気づきの観点が増え、メンバー間で必要な視点が共有できるので、関係者が情報交換の際、深い検討ができ、見守るべき対象、見守り組織の具体的な活動内容を考えることができている。
- ・ 地域包括支援センターに連絡しないといけないかどうか、あるいは見守る回数を一回でも増やせば済むのか、そういう判断する資料にもなる。チェックシートを使ったことで、『この人どうだったかな』と振り返って思い出すときに役立った。また、知らなかったことを知るための質問・観察点として役立ち、知るきっかけにもなった。見守りの際の判断基準となり、社会資源につなげるきっかけとなっている。
- ・ 見守りメンバーによって早期発見されたハイリスクや専門職の支援が必要なケースの状況を的確に、地域包括支援センターに連絡・相談する際のツールとして活用できている。

(2) 見守りチェックシートは「問題あり」の意見

- ・ 項目が多すぎ使いづらい少し絞って欲しい。信頼関係がないと観察のみで記載できない項目が多い。
- ・ 見守りチェックシートを地域ケアシステムの中で実用化していく際には、住民への提示の仕方についての工夫が必要である。
- ・ 家の中に入ったらある程度把握ができるが、外や玄関先とかでは把握しにくい。直接見に行かないと付けられない項目が多いので、自分のすぐ近くならよいが、ちょっと遠いと分からない。
- ・ チェックシート使用後は、訪問や電話など継続した地域の情報提供や声かけを行うなどのサポートが必要になってくるので、単独でのサポートは負担である。
- ・ 訪問に際し、心を開く前座質問をチェックシートに追加して入れると中身の濃いチェックシートができると思う。見守り訪問時の導入コミュニケーション方法について工夫・追加が必要。
- ・ 見守りチェックシート(案) 地域ケアシステムの中で実用化していく際には、住民への提示の仕方について、地域の生活特性を踏まえた日常の観察などの具体例による、わかりやすい説明への工夫が必要である。
- ・ 今回の見守りチェックシート案に関して、地域見守り組織メンバーが見守り対象者の生活の様子を確認することに役立つが、チェックシートの該当項目から対処法が明確になるフローチャートとすることで、チェックシートを有効に活用し、適切な対応までつなげることができると考える。